

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 9 月 5 日現在

機関番号：37502

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02584

研究課題名(和文) 大分県方言談話における対人配慮を中心とした世代差・地域差・性差の研究

研究課題名(英文) Study of Discourse in Oita dialect of differences (generation difference, area difference, sex difference) in Consideration of expression

研究代表者

松田 美香 (Matsuda, Mika)

別府大学・文学部・教授

研究者番号：00300492

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：大分県内の3地点、3世代、男女の組み合わせで調査をした。大分市(県内都市部)、竹田市(県内農村部)、日田市(中間部)である。また、世代は、高年層、大学生、中学瀬いで比較した。その結果、地域差では、「都市性が高いほど配慮表現など定型表現を好む傾向がある」という先行研究に沿った結果が見られた。世代差では、中学生の配慮表現は質・量ともに他世代より劣る傾向が見られた。世代差では、高年層において対異性の場合のほうが高い配慮表現が使われることがわかった。

研究成果の概要(英文)：We surveyed with 3 locations in Oita Prefecture, 3 generations, a combination of men and women. Oita city (urban area in prefecture), Takeda city (rural area in prefecture), Hita city (middle section). In addition, generations were compared among elderly people, college students, junior high school students. As a result, in the regional differences, there were results that were consistent with previous studies that "higher urbanity tends to prefer fixed expression such as consideration expression". In generational differences, attention expression of junior high school students tended to be inferior to other generations in quality and quantity. And we understood the tendency the advanced age persons used with a lot of the consideration expression when they talked to the opposite sex.

研究分野：方言学

キーワード：方言談話 配慮表現 大分県 地域差 世代差 性差 アспект 依頼表現

1. 研究開始当初の背景

全国的に伝統的方言の危機状況が報告されている。それを受け、さまざまな面からの言語研究が進められているところである。その中で方言談話における研究は、比較的新しい分野である。方言談話に見られる言語行動や言語表現には地域差があることがすでに知られているが、それが何に影響を受けているのか、また、どのくらいの地理的・社会的範囲で差として観察されるのかは、まだ研究の余地がある。そこで、比較的まとまった方言談話資料を有する大分県で、都市部と非都市部の方言談話を分析することにした。

2. 研究の目的

本研究は、大分県内における方言談話の地域差・世代差・性差を見ることを目的とする。その際、言語コミュニケーション上重要な要素である(対人)配慮表現を中心に比較する。

3. 研究の方法

大分市内、竹田市内、日田市内の県内3か所に調査地を絞り、それぞれの地域生まれ育ちの高年層、大学生、中学生の3つの年層(世代)の会話をロールプレイ調査(「依頼」「申し出」「質問」が含まれる)によって収録・分析し、その中から対人配慮のための言語表現を特定し、比較した。

ロールプレイ調査：同じ世代の友人・知人の男Aと男B、女Aと女B、男A女B、女A男Bのペアで行う。それぞれ4組のペアに同じ調査票を使い、ロールを踏まえながら即興で会話してもらう。調査中の2名が会話する間、他の2名は別室で待機。AとBの調査票は互いが見せ合わないようにする。録音直後に、被調査者たちに日常的な会話同様であることを確認した。

その後、文字化しエクセルで一覧表を作成した。一覧表は「ターンを単位として、セルで区切」った。音声と一覧表を連携研究者と研究協力者に渡して確認を行い、それを資料として、各々の研究に利用できるようにした。

4. 研究成果

4-1. 地域差と世代差

地域差では、西尾(2012)に示されているように、「都市性が高いほど配慮表現など定型表現を好む傾向がある」という先行研究に沿った結果が見られた。世代差では、中学生の配慮表現は質・量ともに他世代より劣る傾向が見られた。

(1) 「当番交替」申し出後の言語行動

「当番交替」談話が行われた直後に、Aへの質問で、「Bに対してゴミ当番・アルバイト・ラジオ体操を替わってくれることを、どの程度申し訳なく思うか」という質問をしている。その結果、竹田市と日田市ではすべての回答(A側担当の全員)が「少し申し訳なく思う」以上を回答した。申し訳ない気持

ちを抱きつつ発話をしているAは、配慮のための言語行動・表現を使用するであろう。そこで、今回は「当番交替」の申し出後のAとBのやりとりに注目することにした。

表1 大分市 2015年調査「当番交替」

《申し出》後のAの機能

的要素出現一覧

《謝辞》 ○:有り、 :複数有り

《恐縮の表明》

《心情説明》

	高年層				大学生				中学生			
	男A		女A		男A		女A		男A		女A	
A側												
B側	男B	女B	女B	男B	男B	女B	女B	男B	男B	女B	女B	男B
	○			○	○	○			○	○	○	
							○				○	
	○				○	○						

表2 竹田市 2016-2017年調査

	高年層				大学生				中学生			
	男A		女A		男A		女A		男A		女A	
A側												
B側	男B	女B	女B	男B	男B	女B	女B	男B	男B	女B	女B	男B
	○	○			○				○	○	○	○
		○									○	○
	○	○			○							

表3 日田市 2017年

調査

	高年層				大学生				中学生			
	男A		女A		男A		女A		男A		女A	
A側												
B側	男B	女B	女B	男B	男B	女B	女B	男B	男B	女B	女B	男B
	○	○							○	○		○
		○						○				
			○			○		○				

印は、該当する対人関係において、より高い待遇表現がなされることを示す。=印は、同じ待遇度を示す。

4 - 3 . 大分県のアスペクトの動態

アスペクトの実態を探るためには、場面設定をした上で、よりヨル形が出やすい状況にした談話調査が必要であると考え。そのことで、ヨル・トルの対立の実態がよくわかってくると思われる。実際の談話では、別の動き（否定形はテナイ）が見えてきた。

現時点では、福岡・大分ともに、大きくは、まだヨル・トル（チョル）の対立が維持されている。ただし、その揺らぎも垣間見られ、福岡では、否定形の多くがテナイ形になる点に、大分では、男子大学生のトルそしてテルへの動きに、その予兆がうかがわれると考えられる。福岡と大分で異なる点が興味深い点であり、アンケートではつかみにくい実際の使用状況を知ることができたことが重要なことだと思われる。ヨル・トルの区別というよりも、語形が変化する姿が浮かび上がってきた。

（4 - 1 . ~ 4 - 3 . 『大分方言談話の配慮表現を中心とした地域差・世代差・性差の研究』より抜粋。一部改変）

5 . 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計1件)

日本語学会 2017 年度秋季大会で研究発表「大分方言談話から見た配慮表現の世代差と地域差」

〔図書〕(計2件)

松田美香、杉村孝夫、二階堂整『大分方言談話の配慮表現を中心とした地域差・世代差・性差の研究』（編著者）科研費研究成果報告書,2018

松田美香「大分方言談話に見るコミュニケーション力」小林隆編『コミュニケーションの方言学』（共著）ひつじ書房,2018

〔産業財産権〕

出願状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6 . 研究組織

(1)研究代表者

松田美香 (Matsuda Mika)
別府大学・文学部・教授
研究者番号：00300492

(2)研究分担者

()なし

研究者番号：

(3)連携研究者

二階堂整 (Nikaido Hitoshi)
福岡女学院大学・人文学部・教授
研究者番号：60221470

(4)研究協力者

杉村孝夫 (Sugimura Takao)
日高貢一郎 (Hidaka Koichiro)
清水勇吉 (Shimizu Yukichi)